

# 越後と琉球の“かすり\*”の発祥時期をめぐる問題点 — 絣伝播説の推移をふまえて —

山崎光子

## I はじめに

「琉球から越後へ直接“かすり”が北上した」とする、後述のような絣の伝播説がひとしきり誌上を賑わせてから四半世紀ほどが経つ。南北に遠く離れた雪国新潟と南海の沖縄とを結ぶ「絣の道」の構想は、読む者に夢を与えてくれたが、その論拠は必ずしもはっきり示されていないように思う。それは、著書や関連雑誌に書かれたものでもあり、また仮説という性質上やむを得ないものでもあっただろう。

ところで、平成の今日になって、さらに本土から沖縄への絣の南下説も掲げられてきており、また異なる視点から越後と琉球の絣の伝播が説かれるようになった。

筆者も、越後縮を研究テーマの一つとしており<sup>1)</sup>琉球絣との類似性には関心を持ち、絣の伝播についても越後側の資料を中心に若干の考察を昭和60年に試みたが<sup>2)</sup>、越後縮に関するその後の新しい史料も関係者によって明らかにされ<sup>3)</sup>、再考察の手を加えなければならなくなってきている。

また近年、沖縄の若手研究者による琉球絣研究も盛んになり<sup>4)</sup>、越後絣の研究成果も問われるようになった。相互の交流によって、絣研究の基礎資料を蓄積しなければならない時期に来ているものと思われる。

ここでは、越後と琉球にかかわるこれまでの絣の伝播説の推移を通観し、その根拠となる資料の周辺を整理し、新出の資料などによって旧来の説を修正するなど、越後と琉球の絣の発祥の時期を絞る作業を試みながら、現時点における問題点を明らかにしようとするものである。

## II 絣の伝播説の推移とその背景

まず、わが国の絣の伝播説はどのように推移してきたのかを概観したい。結論を先に掲げれば、時期によって三つに分類できるであろう。昭和前期、昭和中期、平成期の三期である。

やまざき みつこ  
県立新潟女子短期大学  
新潟市坂井砂山1-19-19 (自宅)

### 1 第一期の絣伝播説

日本の本土の絣意匠の起源は、琉球からの伝播によってもたらされたとするのが一般的である。その琉球への絣技法の伝播は、インドを発祥地としており、沖縄への伝播には、東南アジア〔図1〕経由での北上と、中国経由で東下などの諸説があるが、ここではそれらについてはふれない。



図1 東南アジアの絣 (1973年インドネシアにて収集)

わが国への絣の伝播ルートは従来次のようなものであった。著名な染織史研究者明石染人の昭和6年刊「かすりの史的考察」<sup>5)</sup>によれば、「絣の最も起源の古いものが琉球絣であり、大島絣、薩摩絣や久留米絣がそれに垂いでゐる」としており、その他の、いずれも徳川中期以後に起源を発している絣の名産地として「米沢・伊予・備後・大和・伊勢崎・越後・秩父」をあげており、越後もその一つにすぎない。

「民芸運動」の創始者柳宗悦は、昭和13年によく念願の沖縄入りを果たし、その後は度々民芸協会の関係者と渡島して琉球文化に深く関わっているが、絣の伝播については、昭和17年に書いた「芭蕉布物語」<sup>6)</sup>で、明石とほぼ同じルートをあげている。

「元来絣の手法は印度に起こったものと云われます。それが暫次南洋の島々を伝わって北へと進み、遂に琉球に入りました。(中略)之がやがて大島、薩摩、久留米、伊予と暫次に移り、小千谷の如き遠い北の地にまで名品を呼びさすに至りました」と、特に越後ではなく小千谷に注目している様子が

\* “かすり”とは、日本では紺がすりがよく知られているが、部分的に染め分けた経糸や緯糸を用いて模様を織りだす先染め織物のことである。織るときに、模様部分の糸端が揃わず自然に生じる微妙な「かすれ」が、むしろ「絣の美しさ」として評価され、「かすり」の特徴となっている。「かすり」の呼称もこの「かすれ」からきており、「霞」「飛白」「縹」「加須利」などの字が当てられていたが近年は「絣」に統一されている。

絣技法はインドを発祥地として各地に分布しており、日本にも、7・8世紀に伝来した絣布が法隆寺や正倉院に遺されていて、模様としても技法としても古くからあった。しかし“かすり”の概念で認識され日本独自の絣織物が各地に発生するようになったのは江戸時代からである。そこには琉球絣の影響が色濃く見られるが、その“かすり”の伝播の道筋は明かではなく、僅かな資料をめぐって推測された伝播説の幾つかがある。

みえるが、伝播の最終地としてあげるにとどまっている。

越後紼と琉球紼の類似性については、後述のように、昭和45年に刊行された新潟県小千谷市の元縮問屋西脇新次郎編『越後のちぢみ』<sup>7)</sup>に、同家所蔵の天明2年の『縮切本扣』が掲載されてから話題になったものと考えられるが、実はすでに、30年程前の昭和14年に着目されはじめており、柳宗悦もそのことを若干聞き知っていたために「小千谷」の名があげられたものであろう。

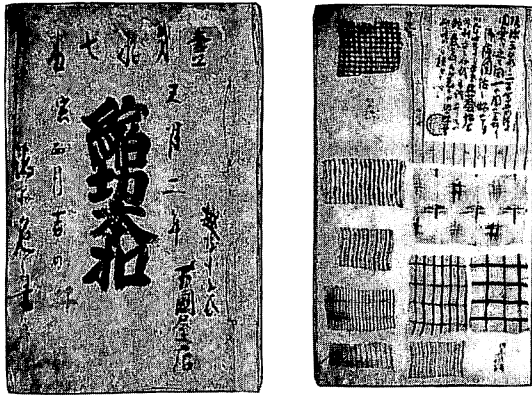


図2 天明2年の『縮切本扣』(左)とその縮裂・付箋(右)

筆者は、『越後のちぢみ』刊行準備のころ、西脇新次郎氏から『縮切本扣』を撮影させていただいたが、その最初の頁の1枚目の裂の上に次のような付箋が貼られてあった。[図2]

「琉球王家=二百年前頃の図案に之と同一の図案在り 御絵図帳と称せり 昭和十四年十月二十二日民芸協会外村吉之介来越ありての談 是と何れが先か興味あり 研究の問題とすべし」記されていた。特に最後の一言、「是と何れが先か興味あり、研究の問題とすべし」は、半世紀後の今日に課せられている問題提起でもあるが、第2次世界大戦の混乱の中で、琉球と越後の紼のかかわりなどは問題にされることもないままに年月が経過していくこととなる。

その先代、8代西脇新次郎の昭和7年刊『小千谷縮布考』、昭和10年刊『小千谷縮布史』<sup>8)</sup>でも『縮切本扣』(当時は井口家の所蔵であった)は紹介されているが、琉球紼との関わりなどにはまったく触れられていない。時期的にみて琉球紼などおよびもつかないことだったのであろう。

## 2 第二期の紼伝播説

沖縄の紼織物研究は戦後しばらくして開花する。柳宗悦の沖縄研究グループの一員で、琉球織物研究者の田中俊雄の『沖縄織物裂地の研究』<sup>9)</sup>が昭和28年に刊行された。

ここでは14・5世紀とする沖縄への紼の伝播が、一つは南方諸国の国王が琉球国王宛におくった礼物とし、もう一つは「それらの諸国にゆきついた琉球国の下級乗組員たちの手によって現地で直接伝習されたものであろう」として、海路による伝播が考えられる。

大正10年から琉球学術調査に取り組んでいた鎌倉芳太郎も昭和38年の「久米島紼についての考察—琉球紼の発祥を論ず」<sup>10)</sup>の中で海流による船の航路からみた伝播の道を探って

いる。「日本海から大陸に沿って南下する寒流に対し、北上する南シナ海の暖流は台湾東岸に沿って淡水方面から久米島西方の海溝に直行する。それが更に東北進して薩摩半島坊ノ岬に達し九州西岸を洗って日本海に入る。坊ノ岬沖で10月25日に投げ錨、それが12月16日、新潟県直江津の東方名立ての海岸に達している。「佐渡おけさ」は船唄であるが、その古形のメロディが今も琉球で唄われていることから往昔の航海が考えられる。越前の人、坂元宋味が琉球に渡り久米島にきて養蚕を教えたことも、この航海線上に置いて考えるべきであろう。」と、日本海側の佐渡・越後を含む北陸路に視点が合わせられる。この最後の越前の人、その後の史料確認で、越後の人に替わる。

以上のような海上の道をベースとして、琉球から越後への直接の伝播説が、さらに本土では他地域にさがけた最も古い時期として浮上することとなる。

昭和41年刊行の織田秀雄の『絵紼』<sup>11)</sup>には、「紼の日本への伝播は、琉球から奄美大島、薩摩、久留米等、若干の前後はあるにしても西から東へというコースであったとされているが、実際には琉球から直接越後に入った別のコースがあり、この方が本土に前者より早く入ったと考えられる」として、「丁度沖縄に南方の紼が入った時と同じように、越後の下級乗組員たちの手によって現地で直接伝習された」こともあってよいのではないかの推測が語られている。また、すでにいわれている資料、沖縄の木綿紼に越後紼に似たイチグと呼ばれる柄のあること、後述の山辺知行氏が見たという琉球の王家の御絵図帳の中に書いてある「越後嶋」の文字のことなど、豊富な資料を裏付けとしてあげている。そして、越後に現存する天明2年の『縮切本扣』にもふれているが、これについては天明期以前にすでに越後で紼が織られている史実をあげ、それが直接越後紼へのより早い紼伝播の根拠とはしていない。むしろ越後に伝承されている寛文・延宝とする紼の創始年を、史的信憑性に疑問を残しながらも論拠としているようである。

越後紼が琉球紼と結び付けて染織雑誌などで頻りに語られるようになったのは、前述の西脇新次郎の『越後のちぢみ』が昭和45年に刊行され、天明2年の『縮切本扣』が公にされたことからであろう。その解説で柳悦孝は、「沖縄と越後は、遠く離れながら、越後米を運んだ帆船が、鹿児島を通し、両地の文物の中継をしたのだらうと思う」<sup>12)</sup>と、日本海側の帆船という具体的な運搬法を推測している。

昭和48年には、織染研究家岡村吉右衛門は「紼は沖縄から二つの経路に岐かれて北に進み、二つの織物文化圏を形造るように思える。二つの文化圏は時代が降りるにつれて入り混る傾向を持つが、本土での紼の主導的地位を持っていたのは小千谷が代表する越後と九州の久留米であろう」直接的な繋りがないと天明帖に見られる酷似の裂は説明の仕様がな<sup>13)</sup>とする。また「薩摩から北上した紼は道を二つにとり、海路対馬暖流に乗ったものの方が、陸路北上した紼より古い」<sup>14)</sup> [図3]と、二つの経路を明示した上で小千谷の主導性をあげている。すでに織田のあげた諸資料は顧慮されず、天

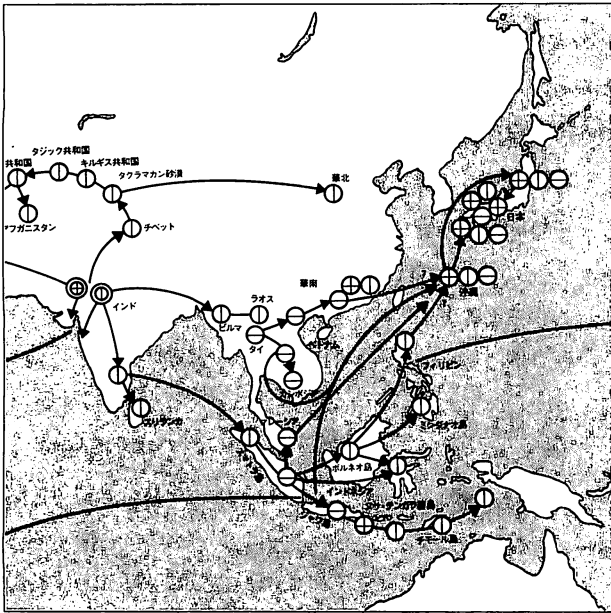


図3 岡村吉右衛門の「絣の発生と伝播想定図」<sup>15)</sup>

明2年の『縮切本扣』のみを対象としているように見える。

染織研究分野の重鎮、元東京国立博物館の山邊知行も昭和49年の『日本染織藝術叢書—絣—』<sup>16)</sup>で次のように述べている。「憶測が許されるならば、少なくとも絣織りに関する限りは日本近世以降の柄絣の技術の母体となっているのはやはり沖縄の絣で、これが主として薩摩を通じて九州に伝わり（中略）次第に北上して各地に根づいて行ったものではないかと思われる。（中略）勿論、その流入の実際に当たっては薩摩経由が主流ではあるけれども、沖縄との物資の交流で、日本の沿岸の他の地方へ直接技術が上陸したということもありえぬことではないけれども、琉球王家に伝わり、現在、尚祐氏所蔵の稿柄を集めた“御絵図帳”の中に“越後稿”という書き入れのある紙片を見たことがある。越後と沖縄の間に薩摩を通じて米の輸送等による関連のあったことも考えられるのではないか。（中略）近世以後の日本の絣産地の分布の南密北粗、又その産地における絣織のキャリアの古さからいっても南から北への伝播ということは明らかなことであり、その元に沖縄を据えることには大きな無理はないと考えられる」。

この第2期とした絣の伝播説は、論拠となる資料をはっきり示されないものもあったが、天明2年の『縮切本扣』出現以来は、それが念頭におかれての沖縄から越後への伝播に焦点が集められていたことには違いないであろう。

### 3 第三期の絣伝播説

平成期に入ってから絣の伝播説には、地元沖縄側から新たな一石が投げられる。平成元年刊行の『沖縄美術全集'第3巻'染織』には、これまでの沖縄織物研究を集大成と思われる「沖縄の織物」が、上江洲敏夫らによってまとめられているが、ここに、沖縄において“かすり”の言葉が1690年に使われている記録などから推論した次のような一文が載せられている<sup>17)</sup>。

「“かすり”という言葉の使用については注目したい。この

言葉が使用されているということは、本土とのつながりを示すものではないか。すなわち、1609年の薩摩の侵入以後、江戸上りなどで本土との交流が頻繁になったところに、絣の技法と“かすり”の言葉が輸入されたことを暗示するものではないか。“かすり”という言葉が本土からの輸入語だという前提が正鵠を得ておれば、沖縄の絣の源流は、前述の二つのルート（インドから沖縄にいたる東南アジア経由の北上と中国経由の東下ルート）のほかに、日本からの南下の可能性が出てくる。（中略）中国や東南アジアから伝播した絣に日本からの“かすり”が加わり、沖縄独自の絣へと昇華され、その絣が海を渡って本土に逆輸入され、久留米や伊予・米沢などの絣に影響を与えたという想定である」。

すなわち、沖縄の絣が東南アジアや中国から沖縄への絣の伝播は当然あるとしても、沖縄と日本本土に限って考えてみれば、沖縄から本土への伝播ではなく、本土から沖縄への“かすり”の伝播の方が先で、そこに他地にはない琉球独自の絣文化が醸成されたのではないかという絣の南下説である。

また、小笠原小枝は平成3年刊の『日本の美術 絣』<sup>18)</sup>の中で「絣は南方の所産であるとするのが今日の一般的な見解である。そして絣が日本へ至った路も、インドから東南アジア・南中国を経て琉球、琉球から日本本土に伝えられたと解釈されているしかし果してそれだけであろうか。確かに薩摩を介して上納された琉球絣は日本の絣生産に大きな影響を与えたであろう。しかしそれは大陸の絣が日本に至る一ルートであったにすぎず、他にも唐船やオランダ船などによって直接運ばれてきたインドや東南アジアの絣類が数多く存在したことを無視するわけにはいかない」としている。新たに名物裂の中にみられり絣技法の存在に目がむけられるようになる。

ところで、長崎巖は平成4年刊行の著書『絣』<sup>19)</sup>で、次のように述べている。「薩摩の琉球支配や海運の発達により、沖縄から薩摩経由もしくは直接に絣が本土にもたらされるようになると、やがてその技術や意匠も伝えられたと想像される。古い越後絣に琉球絣の影響が強く現われている。越後とは日本海航路を通じて早くから交易が行われていたことが推測できる」として一見従来と同様な伝播説ながらも、その根拠にはこれまでにない新たな視点からの切込みを見せている。同書には「素材や模様の上で琉球絣との関係が最も強いと考えられる越後絣においては、製品がおもに縮切絣と同じように武家を中心とする上層階級に用いられた点が注目される。もともと上層階級の間で用いられていた縮切的絹絣に、琉球から伝えられた同じく上層階級の麻や絹の絣の影響が加わり、まずは社会階層の上の方から多様な日本の絣の展開が始まったのである」とある。

同氏の見解は、人間の行動パターンから意匠の伝播を考えようとするもので、同じ上層階級の衣料として、素材や意匠に同じ嗜好パターンのあったことが、絣の導入に連なったのではないかとしている。これは資料の少ない織物文化史研究に、新たに発想の転換による研究の方向性を示すものとして評価されよう。

### III 日本の緋の発祥の時期

#### 1 琉球織物における緋発祥の時期

それでは実際、沖縄における織物への緋技法の導入はいつ頃からはじまったものであろうか。

琉球緋の起源を示すものとして、各所に引用されているため注目していたものに、先の昭和6年の「かすりの史的考察」中で、「明の太祖洪武5年(1372)の頃琉球の名産芭蕉布に経緋が製出された」という一文がある<sup>20)</sup>。大正12年の「沖縄一千年史」にも「最も古きは芭蕉布にて明初の貢物の中に生熟夏布とあるは後世の蕉布練蕉布のことなるべし<sup>21)</sup>とあるため、その1372年の典拠を捜してみた。

琉球は早くから地の利を得た貿易国として中国、日本、朝鮮、ジャム、ジャワ、スマトラ、安南、ルソンなどと交易してきたといわれる。当然織物の交流も考えられるが、文献に残されている最も古い織物の記録は、沖縄の正史『中山世鑑』の1372年に中国に朝貢した「生熟夏布」である。しかし『中山世鑑』の同年代の記録には「其貢物ハ、馬・刀・金銀酒海・金銀粉匣・瑪瑙・象牙・螺殼・海巴・櫛子扇・泥金扇・生紅銅錫・生熟夏布・牛皮・降香・木香・連香・檀香・黄熟香・蘇木・烏木・胡椒・硫黄・磨刀石。此数十種ナリ。是レ進貢ノ始也」とあるのみで、緋に関する記録を見つけたことは出来なかった<sup>22)</sup>。

しかも、沖縄の研究者によって「夏布」の研究は進んでおり、それが従来言われていたように夏布は芭蕉布<sup>23)</sup>ではなく苧麻(からむし)であることが、他の文献資料との照合によって明らかにされている<sup>24)</sup>。朝鮮漂流民の琉球見聞録として知られる『李朝実録』の1546年の「明宗実録」に芭蕉布がよく登場して、繊維の作り方が細かく記してあるが、織りの技法には触れられなく、緋を示す手がかりはない。

ところで、琉球国には1609年、薩摩島津氏の侵入、尚寧王の降伏という一大事が勃発している。それ以降、政治経済はもとよりあらゆる面で大きな変革があった。



図4 宮古島の人頭税石(1993.12撮影)

1637年、琉球王府は先島(宮古・八重山)に過酷な人頭税制(男は穀物・女は織物)を施行した。年齢(15才から50才)を基準として賦課する1717年より以前は、人頭税石を目安にして、子供が成長して身長がその石の高さに達すると税を義務づけたという。[図4]

宮古上布・八重山上布は、御用布座を設置し監視体制を強化して織りあげさせ、その貢納布は薩摩上布と称して売買され薩摩藩の財源となった。

美術工芸は日本からの技術導入が計られるが、織物も同様で、しかも早い時期から越後人がかかわっている。

絹織物は久米島の紬に始まるとするのが通説である。14世紀に中国から技術導入があったとの言い伝えもあるが、資料的に記録されているのが越後国の人によってであった。『球陽』や『琉球由来記』によれば、1619年、那覇にすんでいた越後国、宋味普基(前述の、越前の坂元宋味)が、尚寧王の命を受け久米島に渡り養蚕から真綿の製法を伝えている<sup>25)</sup>。

越後の絹織物の最も古い産地は栃尾(現栃尾市)であるが、それより後の寛文中(1661~72)に長岡藩の機業奨励策として信州から技術導入を計っており、延宝年間(1673~80)に白紬、天明頃から縞紬を織りだし名を知られるようになって<sup>26)</sup>。もっとも越後では古くから養蚕が行われており、栃尾も中世から絹織物があり、会津地方から紬技術の伝播もあったといわれているから、1619の技術指導が不可能とは云い難いが、ここで緋が登場することは後述のようにあり得ない。

1632年には薩摩出身の友寄景友(酒匂与四郎)が王命により八丈島織りの法を久米島に伝えたという記録が『琉球国由来記』(1713)や久米島の<sup>上江洲</sup>家の家譜にあることでよく知られており、これが後年の久米島紬の基礎を築いたとされている。貢布座を設けて管理し、製品は一切他に売買することを禁止し「御用布」にしたという<sup>27)</sup>。

ところで、このとき緋技法は八丈島から導入される可能性はあったらうか。八丈島は、早くから絹織物の産地として知られているが、この年代に照準をあわせると、慶長9年(1604)から徳川氏の支配下におかれ租税穀納の代わりに貢絹制度が確立されて明治初期まで続いている。寛文10年(1672)、享保8年(1723)の年貢は、いずれも黄紬であり、縞柄の50種が永鑑帳で伝えられているが、緋の記載は見られない<sup>28)</sup>。この黄紬は、今日の黄八丈を彷彿とさせるが、同時に、沖縄の御絵図帳に数多く見られる黄地緋をも想起させられる。

また、上江洲家七世智慶の妻が、それまでは縞柄の中に部分的に入れていた緋を、全面的に織り出し久米島紬の新展開をしめしたとされているが、その時期が18世紀では琉球緋の発祥を論じるにはあまりにも遅すぎる。

一方、宮古上布には、1583年に首里王府に上質の<sup>あやぎ</sup>綾錆布を献上したという伝承があり、琉球緋は綾錆布から案出したものではないかとする説もあるが<sup>29)</sup>、綾錆は八重山上布にもあり、今のところ紺縞布として位置づけられている<sup>30)</sup>。

緋が記されている最も古い記録は、1690年の<sup>さんけんじょう</sup>「参遣状」からである<sup>31)</sup>。これは首里王府と八重山蔵元との往復書簡で、御用布として手間のかかるクジリゴーン(崩れ格子)[図5]や種々の「かすり」などが、経縞と同じ代納で織らされている八重山の織手たちのきびしい実状が訴えられている。したがって、17世紀末にはすでに緋模様が定着していたことになる。これは、先の緋の南下説の重要な根拠となっている。

たまたま、当時琉球で織られたと思われる徳川綱誠(1652~

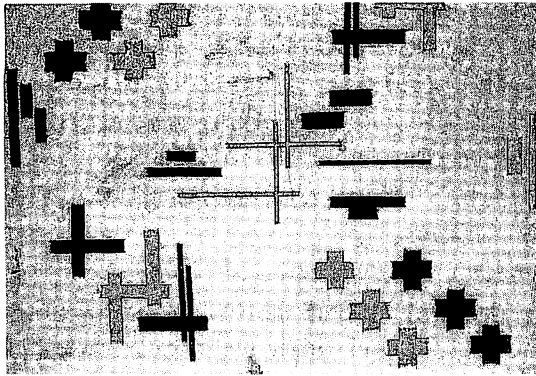


図5 首里王府の御絵図 ムルドウッチリ(総緋)<sup>4)</sup>  
①織り地ではクジリゴーン(崩れ格子)という



図6 17C 末頃琉球で織られたとされる緋縞麻羽織<sup>32)</sup>

99)着用の緋縞麻羽織(徳川黎明会所蔵)が日本側に遺されている<sup>32)</sup>。[図6]

首里王府は織物図柄の『御絵図』帳をつくり、同じ図柄を織るように宮古島・八重山・久米島に賦課した。明治36年(1903)の新税法施行にともなう廃止までのその長い厳しい苦難の歴史が、皮肉なことに琉球織物の緋技術の向上と地域的広がりを見せる結果となっている。

しかし、ここでは、いずれも久米島紬の起源が、南海からの道ではなく、日本本土の遠い越後(現 新潟県)や八丈島(現 東京都)など北からの道に関わりながらもたらされていることに注目したい。また、時期的にみて、八丈織りの貢納付制度までが、その技術とともに南下して久米島に影響を与えたことはなかったのかと危惧する。そして"かすり"の記録が、1690年の「参遺状」以前のどこまで遡り得るのかが、これから問われなければならない問題である。

## 2 日本の織物にみる緋技法の推移

それでは、1609年の薩摩藩の琉球侵攻の以前の日本本土に緋織物はあったのだろうか。緋の伝播に明快な解答が出来ない原因の一つには、日本の緋織物の歴史の複雑さも絡んでいるのかもしれない。

緋は、糸の状態で染め分けてから織る先染め織物であるが、

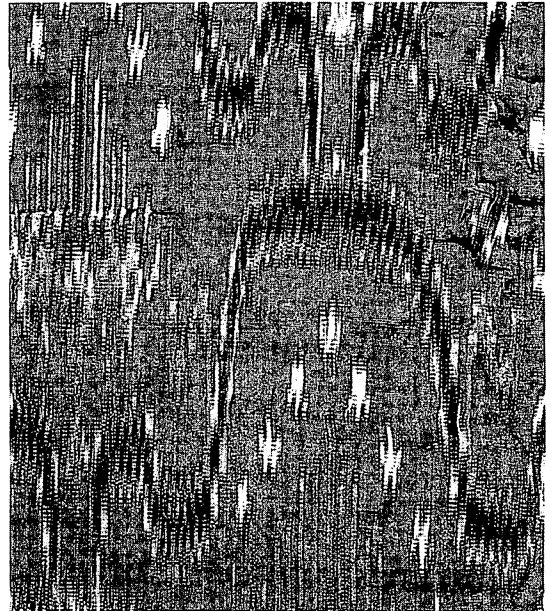


図7 太子広東<sup>33)</sup>

"かすり"とは呼ばれてはいないものの、それに類する技法の織物は、沖繩とは異なって早い時期から認められ、そのルーツもほぼ明らかにされている<sup>16)18)19)</sup>。その緋に類する織物の歴史を通観すると次のようなものになる。

飛鳥・奈良時代の7世紀から8世紀初頭にかけてもたらされた法隆寺伝世の太子広東は、絹製の高度な技法の経緋であり、別名、広東錦[図7]とも呼ばれていたように錦のように扱われていた。しかしこの外来の多彩な模様の緋は日本の風土にそぐわなかったのか後の織物技法に直接影響を及ぼすことはなかったようである。

平安時代には、単純な交互に染め分けた紐や平緒の帯などの組紐もみられるが、織物は鎌倉時代からであろう。室町から桃山時代にかけて「腰替わり」(腰の部分のみ染め色が異なる)や「段替わり」(石畳状に染め分ける)の小袖や能装束がかなり現存している。これらは織り幅の経糸をそのまま括って染め分けてから緯糸を織り込んで段模様を表す技法で"締切"とよばれている。江戸時代になると武家の男子の袴の下に着用する熨斗目小袖に「腰替わり」が多く用いられるようになる。[図8]わが国で考え出されたと思われる緋以前の技法は、具象的な模様を伴わない"締切"緋であった。

このほか、飛鳥・奈良時代に続く第2期目の外来文化としてポルトガルやスペインとの貿易でもたらされた室町時代のいわゆる「名物裂」の更紗[図9]中にも、あまり多くはないようであるが、インドや東南アジアの多彩な模様の木綿緋も見られる。しかしこれも太子広東と同様、近年までその影響はあまり注目されていなかった。

ところで、ここで問題にしなければならない"かすり"についてであるが、その言葉の初出は、よく知られているように、1603年、長崎学林編集の『日葡辞書』に見えてくる。この時期は1609年の薩摩藩の琉球侵攻よりわずかとはいえ早い。両者のみを単純に並べれば、緋は日本本土から琉球へ南下することになる。



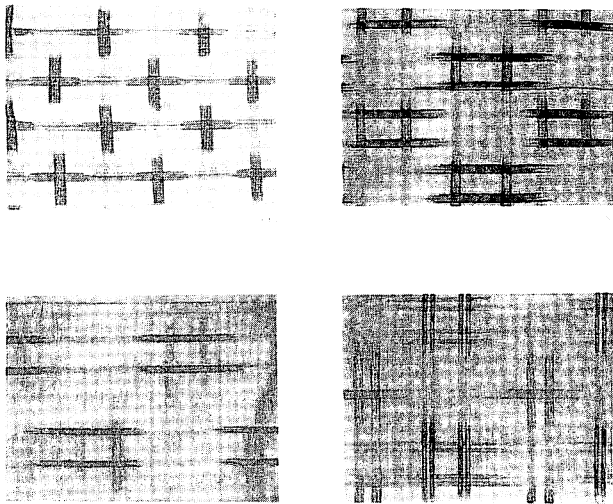


図8 “縮切” 紺<sup>34)</sup>

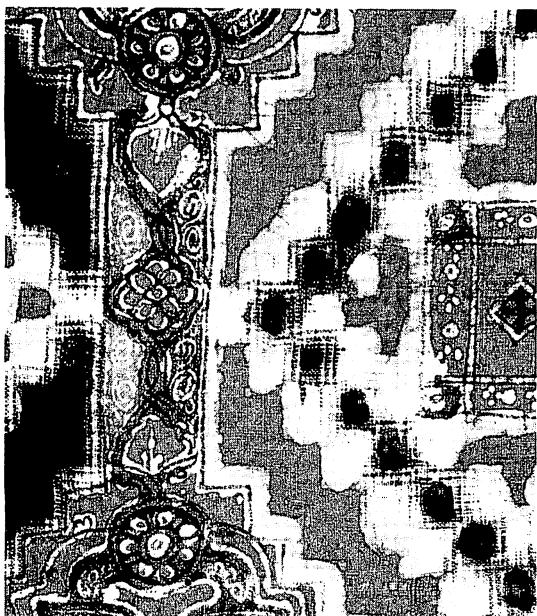


図9 更紗裂の紺<sup>35)</sup>

この日葡辞書の“かすり”は、日本の紺の発祥にかかわるターニングポイントになるのであろう。しかし論究する前に、早々にこの“かすり”は、琉球の八重山地方の方言を記したものと後述のように処理され、問題の埒外におかれてしまい、先のように、天明の縮切帖をきっかけに越後にまつわる紺北上説が展開していったものと思われる。

### 3 越後縮への紺技法の導入時期

日本本土の各地にある織物産地には、それぞれ紺の創始にまつわる伝承があるが、それを時代順に列挙してみると、不確かなことの多い言伝えを対象とするとはいえ、最も古い時代に位置するのが縮織りの産地として知られていた越後の紺である。そのことも紺の越後への直接の伝播説を説く要因になっていたものであろう。

越後紺の発祥を寛文・延宝期(1661~80)とすることは、越後布(苧麻の布)を“縮”織物にした越後縮中興の祖、小千谷の明石次郎(堀次郎)に起因するものと思われる。しかし

当時は、柳條<sup>しりょう</sup>についての記録はあるが、紺の存在を語るには無理のあることは既に明らかにした<sup>36)</sup>。それでもなお越後紺の起源は享保年間(1716~35)以前と、今のところ日本本土の他の織物産地と並べてみても早い。わずかに奄美大島で享保年間から単純な手括りの紺が織られたといわれており<sup>37)</sup>、続く元文年間(1736~40)になると薩摩紺(木綿)や河内国の上ノ紺、沼紺、柳紺が織り始められており<sup>38)</sup>、大和紺は宝暦年間(1751~63)に越後上布の紺をみて織ったとされている<sup>39)</sup>。

越後の紺の起源を享保以前とする説の根拠は、明治36年の『北越機業史』の「享保年間以前において、越後小千谷の織工、カスリチヂミを製す、甚だ佳なり、其の最も上品なるも、亦上布という、慶長以来の人、チヂミアサを以て、専ら夏日の服となす、是に至りてカスリチヂミ、カスリ麻布甚だ盛んなり」<sup>40)</sup>に基づくものであろうが、実際に当時、江戸などで着られていた越後縮に紺模様は在ったのであろうか。

享保17年(1732)の『萬金産業袋<sup>ばんきんさんずぎわいぶくろ</sup>』をみると<sup>41)</sup>、「越後縮」の項に「島、しろ、生。島には男島しなじな、女もよう、紅入、桔梗入等は」とあり、男縮とは異なる女模様のあることがわかる。特に紺にはふれてないが、あるいは女模様の中には紺も含まれることもありうるのではないだろうか。同書の「八反掛島」の項には(八反掛島は、八丈島産の上質の絹織物で、1反の値段が紬の8反分に相当することから名がついたともいう)、「島もよう品々」として「小がうし島、千筋、かすり、大立てじま、紅入はっかけ等、多くは女もようなり」と、女もようの中に「かすり」が、八丈島がらみででてくる。「紅入、桔梗入」は、越後では寛政12年(1800)頃の『越之山都登』など以降から「くれなる乃のかすり」や「桔梗紅かすり嶋」等として散見され<sup>42)</sup>、いずれにしても紺に連なる模様である。

この他『萬金産業袋』には「乱ちや宇島」の項にも「かすり」があり、奈良晒の項には「近年手代わりの島、がすり、十もんじ、亀甲入り等かずかずあり」と、十もんじ、亀甲等紺模様の流行のきざしが見える。

越後縮については享保年間の“かすり”の存在を示す明快な資料を見つけることはできないものの、“かすり”の呼称はすでに人口に膾炙されているらしく説明抜きであげられている。

それでは“かすり”は、どこまでさかのぼり得るのだろうか。『萬金産業袋』の刊行より20年ほど前の正徳3年(1713)の『和漢三才圖會』<sup>43)</sup>には、46種類の布帛類や柄模様が挿絵入りで解説されており、越後小千谷の縮布も芭蕉布等と共にあげられている。また、縹<sup>あざ</sup>や柳條<sup>しりょう</sup>などの模様もあるが、いずれにも“かすり”は見あたらない。しかし、八丈絹の項に「縹條亦有品々又有琉球柳條」とあることや、「奥柳條」の聖多黙(他にジャガタラやセイラスがあり、皆西南外国名とある)の説明に「多地蒼色而紺與褐縦柳條木綿厚美也等崩模様亦有」とあること等に注目しておきたい。

越後の紺は、宝暦年間に大和紺の範となったという伝承を先に述べたが、このころ塩沢(現 南魚沼郡塩沢町)における越後縮への紺模様の流行の様子が、鈴木牧之の『永代庚申帖』や『塩沢村旧事記』等から明らかに出来る。資料の詳細については既に報文としたため省くが<sup>44)</sup>、『永代庚申帖』<sup>45)</sup>に

は牧之の母とよが、宝暦8年(1758)頃、それまでの柿色の格子に代わる珍しい模様として、井桁などの単純な紺絣を初めて織りだしたことが記されている。明和2年(1765)頃には皆が紺地を織るようになり値段も大上がりし、明和7・8年(1770・71)には御召縮として地白かすりとともに地紺かすりも納めている。天明から寛政の頃には、鶴亀竜虎など高度な技術を必要とする絣も織りだせるようになっていた。寛政頃すでに越後では、村によって異なる模様の縮を織っていたが、塩沢では、寛政10年(1798)頃の『山海名産圖會』によれば、「紺かすり」の産地として、また天保8年の『北越雪譜』には「模様い或は飛白、いわゆる藍錆といふは塩沢組の村々」と紺絣産地となっている。この藍錆と宮古島の綾錆の近似性にも注目しておきたい。

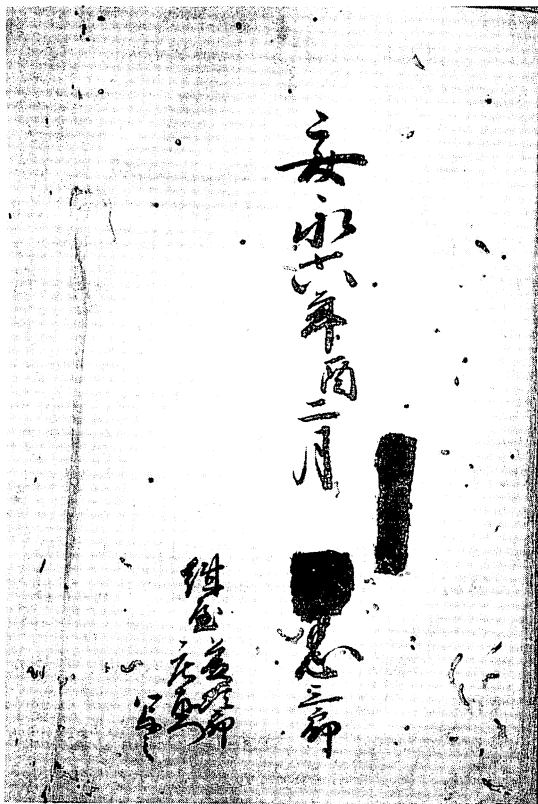


図10 安永6年 越後縮見本帖 奥書<sup>46)</sup>

ところで、越後縮の絣の実物裂について、絣の越後への北上説で賑わした天明2年(1782)の『縮切本扣』以前の絣裂の見本帖が東京国立博物館に所蔵されていることが長崎巖氏によって公にされた<sup>46)</sup>。天明より僅かとはいえ古い安永6年(1777)の堀之内(現 北魚沼郡堀之内町)の越後縮見本帖である。〔図10〕また出所を同じくする縮裂帖も同時期のものと推定され<sup>47)</sup>、それらに貼付されている絣模様は、琉球絣に類似の絣模様もあるが、高度な絣技法による日本的な絣が多い。その他、やはり同館所蔵の十日町(現 十日町市)の『舊幕府御召越後縮見本帖』には、明和期(1764~71)からという大奥向の絣裂が貼られてあり<sup>48)</sup>、地域は異なるものの、先の塩沢の御召縮の記録と一致する。越後は、天明期以前に幕府指定の御召縮産地として絣も織りあげていたことになる。また堀之内の『両御丸御用御召雛形』も同時に所蔵されているが、

これらの裂は明治時代まで「八丈嶋見本切れ」と呼ばれていたらしい形跡がある。

#### IV “かすり” 発祥の時期をめぐる問題点

これまで、越後と琉球のかかわる絣の伝播説の推移を、若干の説明を加えて概観し、また、沖縄・日本本土・越後の絣の発祥時期について新資料も加えて考究してきたが、ここで、絣の発祥時期をめぐる問題点についてまとめてみたい。

先ず確認しておくことは、記録からみると、沖縄の“かおり”は1690年には織ることができるようになっていたが、本土では、今のところ最も古いと思われる越後における絣の織りはじめはようやく宝暦(1751~63)までさかのぼれるにとどまり、その間に6・70年の遅れがある。しかし一方、それより8・90年前、薩摩藩の琉球侵攻以前の1603年に長崎で編纂された『日葡辞書』に“かすり”の語彙がある。

この603年の日葡辞書の“かすり”の由来については、昭和18年に田中によって、八重山発生説が主張され今日に至っている。すなわち「八重山の古くからある絣技法には、染めない部分をくくってから浸染するのカラムヌと、絣糸にする糸を張って紅露の染肉をじかに竹筆でかすりつけるカスルツケ・カスルがあるが、日本語の“かすり”という言葉はこのカスルが語源であろう」としている<sup>49)</sup>。

これは、八重山の摺込み絣のカスルツケの発祥が日葡辞典の1903より早くないと成り立たないが、昭和59年の岡村の書には「八重山では地白絣に紅露染めの赤縞と藍の紺縞との2種類があった。明治末以降、紅露捺染になったが、かつての赤縞は浸染めであった」とあり<sup>50)</sup>、カスルツケの語はかなり新しい日本語であることが推測される。新潟県でもこの摺込み絣は、小千谷市を中心に良く行われていた。

故田中氏の根拠の一つには「この当時日本で“かすり”を織りだしていたのはいまのところの調べによるとひとりこの沖縄のみであるから」もあるが、現在では沖縄の絣が14世紀からあったとする根拠も失われており、“かすり”の語源を沖縄に求めることは必ずしも妥当でないと考えられる。

ところで、『日葡辞書』には、「Casuri かすり 日本の着物に施す彩色法の一つで、雲のような模様の描き方をするもの」とあり、これが確かに絣技法による“かすり”模様を指すものかどうかは疑わしい。小笠原の書によっても、1611年の刀剣書が、「かすりをやく」「地にかすりとしてたてにやけたるもの」など、刀の縦に擦れた状態の模様をさしていることが指摘されている<sup>51)</sup>。

“かすり”の語意は、はじめは模様を指したものであるとして、「模様」と「技法」とを分けて考えるのはどうであろうか。

時代は下るが、文化11年から文政5年(1814~22)の『止戈極要』<sup>52)</sup>の中の、大関増業の書いた「機織彙編」には、機織全般について詳しく書かれているが、絣技法の説明は全くなく、それに相当するものは「熨斗目」の項にある。「熨斗目、腰明きメきりは、たて糸を経て入用之尺を考、延つまり寸尺

を能究め、メ切之場所へ糊無き厚紙を巻、其上に竹皮を掛て、麻にてよく巻、しめる也、其上にて藍にて染る也」と、拵技法が、熨斗目の縮切技法としての確に説明されている。そして「かすり」も全く記されていないわけでもなく、「太子」の説明に「鶯色地、赤、黄、白、モヘギナド大カスリナリ」とあるという。このカスリは技法でなく模様を指していると考えられる。カスリは模様であり、拵技法は熨斗目と呼ばれていたのではないだろうか。

それより百年程さかのぼる、先の正徳3年(1713)の『和漢三才圖會』にも、「熨斗目」はあり、模様は柳條(縞)として扱われていて「かすり」はないが、前にも挙げたように、「八丈絹」の項に琉球の名のつく縞のあることや、「奥柳條」の項に「崩の模様もまた有り」とあることに注目したい。

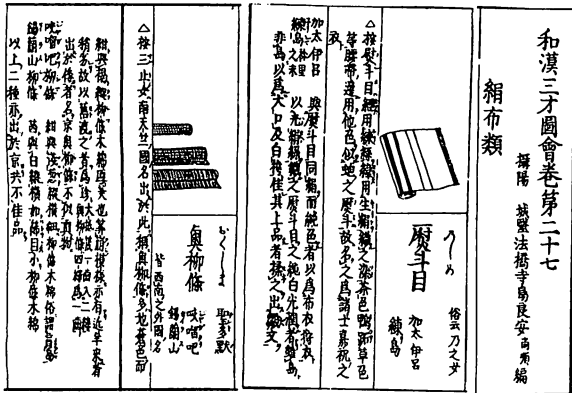


図11 正徳3年(1713)の『和漢三才圖會』の「熨斗目」と奥柳條<sup>43)</sup>

琉球における拵の呼称は、王府のある首里では経緯拵を「ムルドウッチリ」という。ムルは全部、トウッチリは取り切りの意で、技法からきた合成語であり、縞を切りとった意であろう。首里以外の織り地ではクジリゴーン(崩れ格子)と呼び、格子柄の崩れた柄として扱われている。(図5参照)この「崩し模様」・「崩れ格子」が「かすり」模様の別名であったのではないだろうか。

また、拵を発注する首里が、拵を「トウッチリ」すなわち、技法からくる「取切」とするのは、本土の「縮切」拵が技法からくることと類似している。

「トリキリ」については、文政12・3年(1829・30)に奄美大島を調査した、薩摩藩士伊藤助左エ門の記録画の中にもでてくる<sup>53)</sup>。「此カスリを縦横に出したるをトリキリ縞と云う」織物の堅素 熨斗をつけたる図などとして、カスリ・トリキリ・熨斗の三者が並ぶが、模様と技法の違いが明らかであったように見える。

室町から桃山時代にかけて用いられた「腰替わり」や「段替わり」の小袖や能装束は「縮切」といい、江戸時代には武家の男子の袴の下には「熨斗目」の小袖を着用した。いずれも拵の技法の範疇にはいるが、支配者階級においては、技法がその模様の名称になっていたのではないだろうか。それが次第に「かすり」という模様の名にとって代わったのではないだろうか。

拵はもともと縞模様(格子模様も含む)の中に包括されて

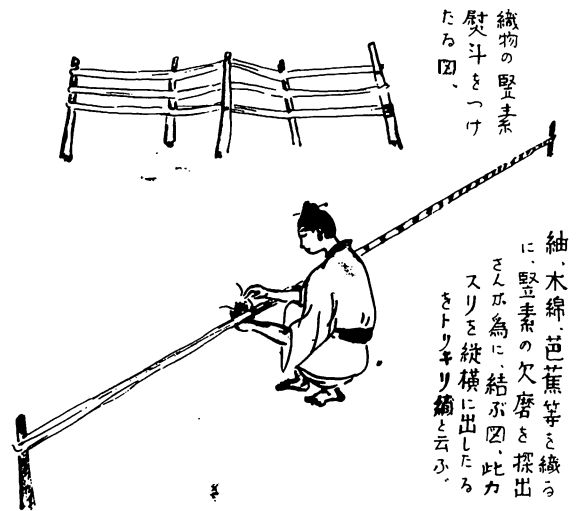


図12 文政12年奄美大島のカスリ・トリキリ・熨斗の図<sup>53)</sup>

いることは、先にもみており、また、ここでは多く触れる余裕を持たないが、最近の十日町市史のためにさがしだされた縮問屋の資料、その他からも十分に窺える。また沖繩においても同様であったことを示す若干の資料もあった。したがって沖繩における「崩れ格子」は、拵模様としてごく自然な呼称なのであろう。

そして琉球と本土、そして越後のかかわりは、徳川幕府を中心に、素材の差異を超え御用布の製織地としての線もひけるのではないだろうか。特に、これまで『和漢三才圖會』や『萬金産業袋』の記事でも注目してきた八丈島の占める位置は興味深い。『越之山都登』や『北越雪譜』に記された「阿ひさひ」「藍錆」と、宮古上布や八重山上布の「綾錆」には、そのルートによる点線がひけないだろうか。日本の維併のルーツはどこにあるのだろうか。

本稿では、併伝播説の推移をふまえながら、越後と琉球の「かすり」の発詳時期をめぐる問題点を明らかにすることを目的としてきたが、今後はその中のいくつかについて機会を得て考究してみたい。

最後に、資料調査にご協力いただきました十日町市史編さん室、東京国立博物館 長崎巖氏、沖繩県立博物館 与那嶺一子氏、沖繩県立芸術大学附属研究所 柳悦州氏、堀之内町史編さん委員 池田亨氏・五十嵐稔氏、県立新潟女子短期大学図書館 鶴巻悦子氏に深謝いたします。

## 文献など

- 1) 越後縮をテーマとしたこれまでの山崎光子の論文類は、次の通りである。  
「越後の麻布と都人」『家庭科教育』47巻 8号 1972。「越後縮発展の要因—織布美への織女の意識—」『県立新潟女子短期大学研究紀要』10号 1973。「越後の民俗服飾—麻布について—」『衣生活』195号 1974。「越後の紅拵」『県立新潟女子短期大学研究紀要』11号1974。「越後の



- 緋の歴史』『市史レポートとおかまち』3集 1989。「越後の御召縮雛形—紅桔梗緋を中心として—」日本風俗史学会 第30回大会研究発表要旨集 1989。「技法からみた越後縮の緋模様」日本家政学会 第44回大会要旨集 1992。
- 2) 山崎光子「越後における緋織りの発生期とその周辺」『越佐の歴史と文化』164頁 考古堂書店 1985
  - 3)① 緋としてはきわめて古い越後縮関連資料の存在が、東京国立博物館学芸部工芸課染織室長の長崎巖氏の著書『緋 kasuri』(小学館1993)で明らかにされた。
    - ② 新潟県十日町市では、市史の一環として織物篇も企画しており、縮関係の新資料が集められている。
  - 4)① 祝嶺恭子・与那嶺一子ほか「琉球王朝時代における御絵図—その1 資料編写真—」『沖縄県立芸術大学美術工芸学部紀要』4号 1991
    - ② 祝嶺恭子・与那嶺一子・柳悦州ほか「琉球王朝時代における御絵図—緋基本単位による分析—」『沖縄県立芸術大学美術工芸学部紀要』5号 1992
    - ③ 柳悦州「御用布絵形の見本」と「御絵図」における緋の分類と比較』『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』第6号1993。特に柳悦州氏は越後緋との関わりに着目。
  - 5) 明石染人『染織文様史の研究』366頁萬里閣書房 1931
  - 6) 柳宗悦「芭蕉布物語」(『柳宗悦選集5』春秋社 158頁 1954)
  - 7) 西脇新次郎編『越後のちぢみ』綾玄社 1970
  - 8) その先代の8代西脇新次郎は、『小千谷縮布考』魚沼実業新聞社 1932(『越後のちぢみ』に再録)と、『小千谷縮布史』小千谷縮布史刊行会 1935を刊行している。
  - 9) 田中俊雄・田中玲子『沖縄織物裂地の研究』明治書房 1952 (遺稿と併せて、田中俊雄・田中玲子『沖縄織物の研究』紫紅社 1976として出版)
  - 10) 鎌倉芳太郎「久米島紬についての考察—琉球緋の発祥を論ず」『美と工芸』京都書院1963(藤本均「緋資料覚え書き」『緋の道』222頁)
  - 11) 織田秀雄『絵緋』38~39頁三彩社 1966
  - 12) 柳悦孝「縮切本扣」『越後のちぢみ』243頁
  - 13) 岡村吉右衛門『日本の緋』69・72頁衣生活研究会 1973
  - 14) 岡村吉右衛門「日本の緋について」『緋の道』198頁毎日新聞社1984
  - 15) 14)の170頁の同図より1部を抜粋
  - 16) 山邊知行『日本染織藝術叢書—緋—』17頁 芸艸堂1974
  - 17) 大城志津子・上江洲敏夫「沖縄の織物」『沖縄美術全集第3巻—染織—』226頁 沖縄タイムス社、1989
  - 18) 小笠原小枝『緋』(日本の美術309号)52頁至文堂 1992
  - 19) 長崎巖『緋』38・116頁 小学館 1993
  - 20) 5)の363頁。「中上氏 緋の変遷」からの引用としてあるが、中上氏については不明。
  - 21) 真境名安興・島田竜治『沖縄一千年史』612頁 沖縄新民報社 1923
  - 22) 『中山世鑑』巻二(『琉球資料叢書』第五 34・35頁 井上書房1962) 本土の図書館にはなかったため沖縄県立図書館の好意で本学図書館に送付していただいた。
  - 23) 1650年編集の沖縄の正史『中山世鑑』の1372年の項の中国への貢物の中の「生熟夏布」や、その後の記録の『歴代宝案』にみられる1489年の「土夏布」の「夏布」は、諸事由来を書いた『琉球国由来記』(1713年編集)によって芭蕉布のこととされていた。
    - 24) 17)の218~220頁
    - 25) 上江洲敏夫「染織資料三題」『沖縄県立図書館 資料編集室紀要』14号 1989
    - 26) 『新潟県史』通史編4 474~5頁 1988
    - 27) 21)の613頁
    - 28) 荒閑哲嗣『黄八丈—その歴史と製法』69・70・79頁 翠楊社 1979
    - 29) 21)の616頁
    - 30) 17)の223頁
    - 31) 17)の226頁
    - 32) 神谷栄子「徳川綱誠所用縞麻羽織について」『美術研究』324号 105頁 1983
    - 33) 19)の11頁から複写
    - 34) のしめ《熨斗目》京都書院 1974 から複写
    - 35) 19)の31頁から複写
    - 36) 2)に同じ
    - 37) 『日本民藝織物全集』別巻 9頁 民芸織物図鑑刊行会 1965
    - 38) 三瓶孝子『日本機業史』166・7頁 雄山閣 1961
    - 39) 芳井敬郎「大和緋の技術」『奈良県立民俗博物館研究紀要』2号 49頁 1978
    - 40) 内田慶三・安藤鑄『北越機業史』9頁 目黒書房 1903
    - 41) 三宅也来『萬金産業袋』巻4(『通俗経済文庫』12巻 1917所収)
    - 42) 2)の163・4頁
    - 43) 寺島良安編『和漢三才圖會』巻27(東京美術 1970)
    - 44) 鈴木牧之『永代庚申帖』文政7年(『鈴木牧之資料集』268.9頁 鈴木牧之顕彰会 1961 所収)
    - 45) 2)に同じ
    - 46) 3)の①に同じ。19)の126
    - 47) 45)と出所を同じくする縮裂帖が、記載されている署名からみてほぼ同期のものであろうことが、地元関係者に依頼した調査でわかった。
    - 48) 19)の126~8頁
    - 49) 田中俊雄「"かすり"という言葉」『民藝』1943年5月号(前掲『緋の道』219~220頁に再録)
    - 50) 岡村吉右衛門「沖縄の緋について」『緋の道』191頁
    - 51) 18)の18頁
    - 52) 大関増業『止戈秘要』『機織彙編』巻7・巻121814~22(原本が入手できず<sup>11)</sup>から引用)
    - 53) 茂野幽考『奄美染織史』10・11頁 奄美文化研究所 1973(挿絵は同書中にある茂野氏の模写による)